結城昌治

自選傑作短篇集

結城昌治

選傑作短篇集

読売新聞社

結城昌治自選傑作短篇集　一九七六年七月一〇日　第一刷　定価九八〇円

著　者／結城昌治　©Shoji YUKI　装幀／池田拓
編集人／酒井堅次　発行人／二宮信親
発行所／読売新聞社
〒一〇〇東京都千代田区大手町一―七―一　〒五三〇大阪市北区野崎町七七　〒八〇二北九州市小倉北区明和町一―一一
印刷所／凸版印刷株式会社　製本所／ナショナル製本　0393―206450―8715　〈落丁・乱丁本はおとりかえします〉

結城昌治・自選傑作短篇集／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

葬式紳士　7
視線　23
孤独なカラス　37
儲けそこない　57
霧が流れた　79
暗い海辺で　115
熱い死角　145
汚れた刑事　167
老後　197
殺意の軌跡　215
風の報酬　233
死んだ夜明けに　267
作家アルバム／ある日ある時　305
自作解説／私の推理小説作法　317

結城昌治・自選傑作短篇集

葬式紳士

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

1

内外計器株式会社社長糸村周吉の葬儀は、どんよりとたれこめた雨雲の下で、絶え間のない弔問客の焼香の煙に覆われていた。

盛大な葬儀である。門前から左右の沿道に飾られた花輪の数は、およそ数十基を越えるだろう。その贈り主の名をみれば、故人の人徳、いや、故人の濶歩してきた業界における勢力のほどが、想像された。

事実、会社の基礎を築いたのが先代であったとはいえ、たかが中小企業のはしくれにすぎなかった会社を、都心に八階建の社屋をもつまでの大会社にのしあげたのは、もっぱら二代目社長周吉の手腕にちがいなかった。

享年五十二歳、寿命といえばそれまでだが、今がいちばん働きざかりというのに、あまりにはかない最期だった。

「見たことのない男だが、あの痩せこけた男は何者かね」

僧侶のながい読経に退屈した専務の種原隆三は、そっと座をはずすと庭先の下駄をつっかけて、玄関先で忙しそうに客の接待をしている秘書課の瀬山に声をかけた。

「どの人ですか」

「あの男だよ。大洋精機の常務と話しているじゃないか」

種原は、すでに焼香を終り沿道に立って出棺を待っている人々のほうへ、長い顎をすくった。

「モーニングを着た人ですか」

「そうだ」

「知りませんね」

瀬山は首を振った。

「知らんことはないだろう。さっき、きみはあの男と話してたじゃないか」

種原の不機嫌はすぐに顔色にあらわれた。

「ほんとに知らないんです。話しかけられたので、話をすることはしましたが……」

「どんな話をしたのだ」

「亡くなられた社長のことなど――」

「もっと具体的に話したまえ」

「あの男は、社長にとても世話になったと言ってました。大学をでられたのも、社長のおかげだったそうです」

「あの男の名前は？」

「聞きません」

「勤め先を言ったか」
「いえ」
「うちの社員じゃないな」
「社の者なら、ぼくが知っています」
「それからどんな話をしたのだ」
「次期社長候補のことなどをききました」
「それで？」
「もちろん、今度の社長は種原専務に違いないと思いますので……」
「そう答えたのか」
「はあ」
「ばかな——」
種原は苦々しそうに言った。
次期社長候補について、瀬山の言葉には阿諛がふくまれている。そうと知りながらも種原は悪い気持はしなかった。苦々しげな表情は、うらはらな内心をかくすためだった。
「あの男を、きみは今まで一度も見たことがないかね」
「初めてです。全く見憶えがありません」
「そうか——」
種原は唇を閉じた。
その男に、種原は見憶えがあったのである。中央銀行副頭取の葬式のとき、早川商事取締役の葬式のとき、そして東都生命営業部長の葬式のときにも、種原はその痩せた男を見かけていた。今日をあわせて四度、種原は彼を見ているのだ。それがいずれも葬式のときに限られている。爬虫類のような細い冷い眼と、ぬるぬる濡れているような皮膚の感じが、その男の印象を種原に残したのだ。
葬式というと必ず現れる男。
——何者だろうか？
それは最初に彼を見たときから、種原の気にかかっていた。
年齢は三十五、六だろう。痩せて背が低く、風采はあがらない。大学をでたというが、知的な匂いは感じられない。そうかといって、やくざのようにも見えないし、堅気のサラリーマンのようにも見えない。喪章を巻いたモーニング姿も、どことなく板につかない感じだった。
種原は、大洋精機の常務と親しそうに話しこんでいる男のほうを眺めて、しばらくその場を動けなかった。

2

応接室に通された男は、白いカバーをかけたソファに腰

を下ろすと、テーブルの上にあった来客用の煙草をとって火をつけた。
黒っぽい背広に地味なネクタイ、痩せこけた頬は、いかにも貧弱な印象を受付嬢に与えていた。
「名前もいわんのか」
種原隆三は不機嫌そうに眉をしかめた。
「はい。ご用件をお伺いしたのですが、大事な用があるとおっしゃるだけで……」
「今度からそういう男は応接室に通しちゃいかんぞ」
種原はぶつぶつ言いながら重い腰をあげると、重役室を出て、応接室のドアを押した。
「お忙しいところを——」
客は立上って頭をさげた。
「……」
種原は思わず息をのんで立ちすくんだ。直ぐには返す言葉が出なかった。
応接室に待っていた客は、社長の葬式に参列して、大洋精機の常務と親しそうに話し合っていた例の痩せた男だった。
「どうぞお掛けください」
痩せた男は先に腰を下ろしてから、種原に着席をうながした。どっちが客なのか分らない。態度は慇懃であった。
「失礼します」
種原がついそう言って腰をかけたのは、すでに、相手に気をのまれてしまった証拠だった。客に接する主人の態度ではなかった。
「社長が亡くなられましたね」
男はしばらく間をおいてから言った。香具師のように太い嗄れ声だった。
「忙しいのでゆっくりお話ししてはいられません。早速ですが、ご用件を伺いましょう」
種原はようやく自分の立場に気づいたように言った。と同時に、この機会に男の正体を確かめたいという衝動にうごかされた。
「社長の後任はお決まりになりましたか」
男は細い眼で種原を見つめた。
「いや、まだ決っていないが……」
「種原専務、つまり、あなたが有力だとは思いませんか」
「何を言うのかね、きみは」
種原はめんくらっていた。質問が唐突だったばかりではない。来訪した男の目的がわからないのだ。
「業界新聞を見ると、次期社長候補は常務の渡辺英作氏が

最有力だと書いてあります。渡辺英作氏は故人の義弟にあたる。未亡人とは姉弟という関係ですな。新聞の観測は正当といえるでしょう。しかし、種原専務のほうが有力だと言う者もないではない。内外計器を今日の隆盛にみちびいたのは、社長の片腕として種原専務がいたからだということは、すべての人が認めている。渡辺英作氏はいわば温室育ちのお坊っちゃんで、苦労をしらない。重役とは名義ばかりで、実際の営業面にはほとんどタッチしていなかった。次期社長として、社運をになうには荷が重すぎる。とすれば、故人のあとを継いで会社をきりまわしていける者は、種原専務以外にない。種原さんが社長になるという噂も、これまた正当でしょう。いかがですか」

男は言葉を切ると、足を組んで背中をもたれた。冷い眼の色は、じっと種原に注がれている。不気味なばかりで、何を考えているとも知れぬ眼差しだった。

男の言ったことは、たしかに事実に近かった。社長が脳出血で死んでから一週間、後任は決っていないが、それは常務の渡辺英作に内定しているといっていいだろう。株主総会の承認を待つばかりなのだ。むろん、種原にとっては不本意な人事である。経歴と実力からいえば、当然種原が社長になって不思議はないところだ。現実の力関係が、それを許さないことを知っているから、種原は諦めているというにすぎない。できるものなら、力をつくしてでも渡辺を追落とし、自分が社長の椅子に坐りたかった。そのためにこそ、今まで会社につくしてきたのではないか。

この種原の内部にかくされた気持を、痩せた訪問者の言葉は見ぬいているようであった。種原が不気味に感じたのはそのせいである。

「あんたはどなたですか」種原は相手の視線をはね返すように言った。「わたしはまだ、お名前も伺っていない」

「そうでしたね、うっかりしてました。しかし、名前などというものに意味はありませんな。わたしのことを三原と呼ぶ人がいるし、水原と呼ぶ人もいる。あるいは、長島と呼ぶ人がいるし、金田と呼ぶ人もいる。いずれにしても、つまらんことです。新しい名前をつけてくださってもいいが、とにかく、お好きなように呼んでもらいます」

「本名は言いたくないというわけですか」

「ご想像にお任せします」

「では、用件を言ってもらいましょう。わたしはあんたに初対面ではない。社長の葬式でも会ったし、東都生命の営業部長の葬式のときにもお目にかかった」

「まだ、わたしのお話ししていることがお分りにならぬよ

うですね」
「わからん。きみは勝手に話しただけで、用件を言っていない。わかるはずがない」
「それでは、もう少し分りやすく話しましょう」男は脚を組みかえた。「先月の三日、小林電機の社長が事故で亡くなりました。憶えておられますか。新聞は割合大きく扱いましたが……」
「どんな事故だったかな」
「車を運転したまま、芝浦の岸壁から海にとびこんだ事件です」
「うむ、憶えている。新聞で読んだ」
「事故の原因はブレーキの故障ということで落着しました」
「それがどうかしたのか」
「別の話をしましょう。先々月の十八日、アイスクリーム製造で有名な加藤食品の重役が、帰宅の途中、トラックにはねられて死亡しました。轢き逃げです。犯人は捕まっておりません。さらに同月二十四日、これはある印刷会社の総務課長ですが、会社の食堂で昼食後間もなく倒れました。死因は心臓麻痺、死亡診断書にそう書かれました。いちばん新しい話を申上げますと、先週火曜日の晩、離婚訴訟中のさる女性が、交通事故で亡くなっています。通りかかった白ナンバーの車に、うしろから跳ねとばされたと新聞には書かれました」
男は言い終ると、下からすくい上げるように種原を見た。
話の内容が暗示していることは明瞭だった。信じがたいが、恐るべき話だった。
「今の話は本当か」
種原の語尾がかすかに震えた。きいてはみたが、調べればわかる嘘をつくはずがなかった。
「ご不満なら、もっと別の例をあげましょうか」
痩せた男の薄い唇が割れて、不揃いな歯がのぞいた。笑ったのである。
「うちの社長の場合はどうなのだ。脳出血と聞いてはいるが……」
種原はもはや真剣だった。
「大分疑い深くなりましたな。大へんいい傾向です。しかし、そういう質問は、わたしになさっても無駄と思ってください。社長の死んだことは、新聞の死亡広告で知ったとしか答えようがない」
「それでは聞くまい。用件もわかった。お帰りを願いま

す」
「帰れですって？」
男は驚いたようだった。
「そうだ。わたしは人殺しを頼むような男ではない」
「社長にはなりたくないんですか」
「人を殺してまで、社長になりたくない」
「とすると、弱りましたな。ほかのお客さんをさがさなくてはならない」
「ほかの客？」
今度は種原がおどろいた。
「そうです。わたしは人見しりをする性分でしてね、嫌いな人を客にしたくないのです。種原さんが気に入ったから、こうして参ったわけですが、しかし断られたとなると——」
「待ってくれ」
種原の頭は目まぐるしく働いた。もし自分が断ったら、この殺し屋はほかの者のところへ行くだろう。そしてまかり間違えば、種原を殺してくれという者にぶつかるかもしれない。
渡辺英作を別にしても、社長候補は種原に限られていないし、種原に敵意をもっている者も少くはないはずだった。
種原は考えているうちに、目前の男の恐ろしさがわかってきた。この男に選ばれたことは、因果であるとともに、幸運ではないのか。へたに恨まれたら、今度は自分の命が危いのだ。そしてもし、彼に万事を託して成功すれば、目を閉じていても社長の椅子が迎えにくるだろう。
種原の心が傾いた。
「条件を聞こう。話にのるものらぬも、それからのことだ」
「結構です」
「いくらだ」
「百万円」
男は明快に答えた。
「高いな」
「よくお考えになってください。決して高くはないはずです」
「かりに今日頼んだとして、いつ頃までに仕事を終るかね」
「期間は一か月いただきます。一か月以内に相手が死なないなかったら、以後十日経つごとに十万円ずつ割引きます。つまり、一か月と十日以内なら九十万円、さらに十日を経た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo